

編集後記

2021年11月13日午後、東アジア文化研究科設立10周年記念行事、「文化交渉学の過去と未来」と題するパネルディスカッションが以文館四階セミナースペースとオンライン同時配信、いわば「線下」・「線上」併用の方式により開催され、約80名の出席をえたという盛況でした。その趣旨は、二階堂善弘研究科副科長が事前に配布したポスターやチラシで次のように説明されています。

関西大学大学院東アジア文化研究科は、2011年に独立した研究科として発足しました。それから今年度で10年になります。実際には2008年度からの文科省のグローバルCOEを受けて文学研究科文化交渉学専攻として活動していた時期もあります。合わせてこの14年の間、数多くの修了生を世に送り出してきました。文化交渉学の修士号、博士号を得た修了生たちは、世界各国で研究者となり、また企業や機関などで活躍しています。開設10周年に当たりまして、研究科では修了生を中心に、パネルディスカッションを開催したいと思います。

当日のパネラーとして、会場におられたのは河田悌一元学長のみで、博士号取得後、中国、日本とイタリアの大学専任教員となった8名の修了生がみなオンラインで参加しました。修了生のなかには、日本出身者が中国で、韓国出身者がイタリアで、オーストラリア出身者が日本で活躍しているケースもあり、グローバル時代の雰囲気を感じさせます。また、中国の勤務先には、北京大学・武漢大学・廈門大学・北京語言大学などの名門校も含まれており、本研究科の修了生の資質の一面が反映されていると言えます。さらに、数名の修了生がすでに編著や訳書を出しているのも、その持続的努力の様子が窺えます。

修了生の生き生きとした姿を目にし、その元気な声を聴いている間、私はふと1984年12月から約半年間の関大留学のことを思い出した。関西大学と姉妹校となった最初の中国の大学は遼寧大学であり、その次が復旦大学でしたが、交流協定が結ばれたのは、いずれも改革開放初期の1983年でした。当時復旦大学大学院で幕末の日英関係をテーマに修論執筆中の私は資料収集のために日本訪問の機会を探していましたが、運よく、関西大学文学部長を務めておられ、優れた日中交渉史の研究と活発な日中学術交流活動で有名な大庭脩先生（1927年-2002年）が受け入れてくださいました。訪問中の身分は「大学院交流研究生」でした。その後、1986年春から同じく北摂にある大阪大学の大学院後期課程学生になりますが、関西大学図書館の素晴らしいコレクションを継続利用させていただきました。時折先生の研究会に顔を出し、その盛大な日本学士院賞受賞祝賀会（同年6月28日大阪のホテル・プラ

ザにて開催)にも参加しました。1989年には、百周年記念会館落成を記念する国際シンポジウムが開催される際、復旦大学の呉傑先生(私の指導教官)のほかに、内藤湖南研究を学位論文のテーマにした著名なジョシュア・フォーゲル先生(コロンビア大学博士)と譚汝謙先生(プリンストン大学博士)などが講演者として招かれましたが、私も会場で聴講しました。1988年秋、約1ヶ月半にわたる初訪米の機会を得ましたが、ビザ申請時、大庭先生のご自宅の書斎で知り合いになったイリノイ大学教授ロナルド・トビ先生(1942年お生まれ)のお世話になりました。トビ先生が2012年第1回日本研究功労賞を受賞された時、私も東京上野公園にある日本学士院の授賞式会場に駆け付け、壇上に立ってそのコロンビア大学院時代の指導教官であられるドナルド・キーン先生による祝福の対面挨拶を受けるその晴れ姿をこの目で見ることができました。

阪大大学院在学中、前後して関西大学客員教授として招聘された復旦大学の潘旭瀾先生(中国近現代文学)と樊樹志先生(明清史)とも交流しました。松浦章先生と大阪大学の濱島敦俊先生が樊先生を奈良にご案内される際、私もその一行に参加し、明日香村周辺を散策し、石舞台古墳などを見学してから、関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館のセミナー施設で一泊し、楽しく語り合ったことは、つい昨日のことのように覚えています。

以上のような経緯もあり、私は自分を「正規の関大留学生」でもあったと思っています。したがって、この8名の修了生を含む文学研究科文化交渉学専攻、そして2011年東アジア文化研究科設立後に入学した留学生を、学生だけではなく、自分の後輩でもあると考え、できるだけ指導と世話をしました。

「光陰矢のごとし」。関大在職26年後、そして東アジア文化研究科所属10年後の来月、私は退職することになります。長い間、多くの同僚や同志、学生や友人に恵まれた私は幸せを実感しています。この紀要15号の編集作業は吾妻重二先生と奥村佳代子先生のご指導とゼミ生張亞敬、顔龍龍、邱吉諸君のご協力がなければ遂行することができなかつたはずである。また一つの忘れがたい経験となりました。

この機会で本号の寄稿者全員およびお世話になったすべての方々に厚く御礼申し上げます。

陶 徳 民

2022年2月23日